

ステージピアニストの作り方

ー井上ひさしの音楽劇のピアニスト考ー

坂本 麻実子

How to Make A Stage Pianist
ーon A Pianist in The Music Dramas by INOUE Hisashiー

SAKAMOTO Mamiko

E-mail : msakamot@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：井上ひさし、音楽劇、ガーシュイン、ピアノ、ピアニスト
keywords : INOUE Hisashi, Music Drama, Gershwin, Piano, Pianist

はじめに.

井上ひさし(1934-2010)は演劇界へのデビュー作「日本人のへそ」(1969年2月初演)から最後の新作となった「組曲虐殺」(2009年10月初演)までの40年間、役者たちの歌を伴奏するためにピアニストを使用する作品を断続的に書いてきた。ピアニスト1名を使うのが井上が愛用するやり方である。

表1-①に示すように、井上の音楽劇でピアニスト1名を使う作品は13本をあり、この中に「日本人のへそ」も「組曲虐殺」も含まれる。表1-①のピアニストは舞台上で演奏するので、客席から見える。2001年以降になると、表1-②に示すようにピアニスト(またはキーボード奏者)1名を含む小楽団を使う作品も「夢の裂け目」以下4本ある⁽¹⁾。表1-②の小楽団のピアニスト(またはキーボード奏者)は他の楽器奏者とともにオーケストラピットにはいって演奏するので、客席からは見えない。また、井上の音楽劇のピアニストには役名をもつ者ともたない者がいる。表1-①の「日本人のへそ」から「連鎖街のひとびと」までの7本のピアニストは役名をもち、演奏と演技を行う。表1-①の「太鼓たたいて笛ふいて」から「組曲虐殺」までの6本のピアニストと表1-②の全4本のピアニスト(またはキーボード奏者)は役名をもたず、演奏に専念する。なお、初演ピアニストのうち服部公一(日本人のへそ)と小曽根眞(組曲虐殺)は作曲も兼ね、音楽全般を担当する。表1-①の6本(黙阿彌オペラ、連鎖街のひとびと、太鼓たたいて笛ふいて、

兄おとうと、円生と志ん生、私はだれでしょう)と表1-②の全4本(夢の裂け目、夢の泪、夢の痂、箱根強羅ホテル)、合計10本の初演ピアニスト(またはキーボード奏者)に起用された朴勝哲は、「兄おとうと」の演奏によりピアニストとしては初めて第11回読売演劇大賞優秀スタッフ賞を受賞し、「組曲虐殺」の初演ピアニストで作曲者でもある小曽根眞は第17回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞を受賞した。自作に起用したピアニスト二人までも演劇界の賞を取らせた劇作家は井上の他には例がない。筆者は以前から井上の音楽劇のピアニストに関心を払ってきたが(坂本2004, 2009)、井上が没した今、ピアニストについて再考し、井上が作り出したステージピアニストの独自性を明らかにする。そもそも、井上はなぜ音楽劇にピアニストを使うのか。そこで、井上が愛好した作曲家ガーシュイン Gershwin, George (1898-1937)が自作自演のピアニストとしても活動したことに着目し、井上のガーシュイン愛好と音楽劇におけるピアニストの使用の関連から考えてみたい。

井上は「現在でもガーシュインは、クルト・ワイルと並んで、わたしにとっては最高最大の作曲家である」(井上1992:111)と言う。また「モーツァルトはめったに聴かないが、ガーシュインなら一週間ぶっ続けに聴いても平気である」(井上1998b:72)とも言う。ガーシュインより2歳年下のワイル Weill, Kurt (1900-1950)は、ガーシュインと同じくオペラやミュージカルを作曲した。古典派を代表する作曲家モーツァルト Mozart, Wolfgang

表 1. 井上ひさしの音楽劇のピアニストの使用状況

1-①. ピアニスト 1 名を使用する音楽劇

タイトル()内は初演年月	役名[]内は初演者名	担 当		
		演奏	作曲	演技
1 日本人のへそ (1969.2)	ピアノ伴奏者 [服部公一]	○	○	○
2 きらめく星座 (1985.9)	森本忠夫 [村上俊哉]	○		○
3 國語元年 (1986.1)	江本太吉 [村上俊哉]	○		○
4 花よりタンゴ (1986.9)	森川俊夫 [村上俊哉]	○		○
5 黙阿彌オペラ (1995.1)	陳青年 [朴勝哲]	○		○
6 紙屋町さくらホテル (1997.10)	浦沢玲子 [深澤舞]	○		○
7 連鎖街のひとびと (2000.6)	崔明林 [朴勝哲]	○		○
8 太鼓たたいて笛ふいて (2002.7)	なし [朴勝哲]	○		
9 兄おとうと (2003.5)	なし [朴勝哲]	○		
10 円生と志ん生 (2005.2)	なし [朴勝哲]	○		
11 私はだれでしょう (2007.1)	なし [朴勝哲]	○		
12 ロマンズ (2007.8)	なし [後藤浩明]	○		
13 組曲 虐殺 (2009.10)	なし [小曽根眞]	○	○	

1-②. ピアニスト (またはキーボード奏者) 1 名を含む小楽団を使う音楽劇

タイトル()内は初演年月	役名[]内は初演者名	担 当		
		演奏	作曲	演技
1 夢の裂け目 (2001.5)	なし [朴勝哲]	○ キーボード		
2 夢の泪 (2003.10)	なし [朴勝哲]	○ キーボード		
3 箱根強羅ホテル (2005.5)	なし [朴勝哲]	○ キーボード		
4 夢の痾 (2006.6)	なし [朴勝哲]	○ ピアノ		

Amadeus (1756-1791) も数々の傑作オペラを書くとともに、ガーシュインと同じく自作自演のピアニストでもあった。クラシック音楽では作曲にピアノは欠かせず、自作のピアニストを兼ねる作曲家は珍しくない。しかし、井上にとってピアノはどの作曲家よりもガーシュインと結びついていた。それは井上が少年時代に夢中になって観たガーシュインの伝記映画「アメリカ交響楽」(原題「ラプソディ・イン・ブルー Rhapsody in Blue」。1945年)の印象によるものではないかと筆者は推測する。

1. 「アメリカ交響楽」

「ブロードウェイ仕事日記」(井上1992)というエッセイによれば、井上は中学1年のときに「アメリカ交響楽」を「七回も八回も観た」という。ガーシュインは1898年にニューヨークの貧しいユダヤ移民の家庭に生まれ、中古ピアノで練習し、ティン・パン・アレー Tin-Pan Alley のレミック社でピアニスト(楽譜を売るために演奏デモンストレーション

を行う)として働きながらチャンスをつかみ、1920年代から30年代にかけてアメリカで最も成功した作曲家となって上流社会にも出入りするが、脳腫瘍のため38歳で急逝した。「アメリカ交響楽」はガーシュインの人生を彼の主要作品の演奏シーンを挿入しながら描く。ガーシュインの伝記作者は「アメリカ交響楽」がガーシュインの人生をロマンチックに脚色しているとして評価しない(クレシュ1989, ウッド1998)。しかし、映画のタイトルになった「ラプソディ・イン・ブルー」をはじめ演奏シーンは見ごたえがある。また、伝記作者が「ジョージは一生、ピアノを弾くのが好きだった」(ウッド1998: 34)と指摘するように「アメリカ交響楽」もガーシュインを描いている。表2には「アメリカ交響楽」で使用されたガーシュイン作品をDVDと英和対訳台本⁽²⁾から検討して28曲をリストアップした。

表2によれば「アメリカ交響楽」の使用曲は、出世作「スワニーSwanee」(1919。人気歌手アル・ジョルソン Al Jolson がヒットさせ、「アメリカ交響楽」にも出演して歌う)、「誰かが私を愛してる Somebody

表2. 「アメリカ交響楽」で使用されたガーシュイン作品

歌曲① ショーの挿入歌
スワニー Swanee (シンバット Sinbad, 1920) 天国への階段をかけよう I'll Build a Stairway to Heaven (ジョージ・ホワイトのスカンダル1922年 George White's Scandals of 1922) ブルー・マンディ・ブルース Blue Monday Blues (ブルー・マンディ Blue Monday, 1922) 誰かジョーを見なかった? Has One of You Seen Joe? (ブルー・マンディ Blue Monday, 1922) ママに会いに行くよ I'm Gonna See My Mother (ブルー・マンディ Blue Monday, 1922) 誰かが私に恋してる Somebody Loves Me (ジョージ・ホワイトのスカンダル1924年 George White's Scandals of 1924) 魅惑のリズム Fascinating Rhythm (レディー・ビー・グッド Lady, be Good, 1924) レディー・ビー・グッド Lady, Be Good (レディー・ビー・グッド Lady, be Good, 1924) 手拍子合わせて Clap Yo'Hands (オー・ケイ! Oh,Kay!, 1926) ドゥー・ドゥー・ドゥー Do, Do, Do (オー・ケイ! Oh,Kay!, 1926) 誰かが私を見つめてる Someone To Watch Over Me (オー・ケイ! Oh, Kay!, 1926) 私の彼氏 The Man I Love (ファニー・フェイス Funny Face, 1927) スワンダフル 'S Wonderful (ファニー・フェイス Funny Face, 1927) ライザ Liza (ショー・ガール Show Girl, 1929) チャンスを待つ I'm Biding My Time (ガール・クレイジー Girl Crazy, 1930) 抱きしめたいあなた Embraceable You (ガール・クレイジー Girl Crazy, 1930) アイ・ガット・リズム I Got Rhythm (ガール・クレイジー Girl Crazy, 1930) 私のもの Mine (ケーキを食べさせよう Let'em Eat Cake, 1933) ラブ・ウォークト・イン Love Walked in (ザ・ゴールドウィン・フォリーズ The Goldwyn Follies, 1938)
歌曲②オペラのアリア
サマータイム Summertime (ポーギーとベス Porgy and Bess, 1935) くたびれもうけ Oh,I Got Plenty O'nettin (ポーギーとベス Porgy and Bess, 1935)
歌曲③その他
もう一度 Do It Again (1922) ヤンキー・ドゥードル・ブルース Yankee Doodle Blues (1922) デリシャス Delicious (1931)
器楽曲
ラプソディ・イン・ブルー Rhapsody in Blue (1924) ヘ調のピアノ協奏曲 (1925) パリのアメリカ人 An American in Paris (1928) キューバ序曲 Cuban Overture (1932)

Loves Me」(レビュー「ジョージ・ホワイトのスカンダルス1924年 George White's Scandals of 1924」),「魅惑のリズム Fascinating Rhythm」(ミュージカル「レディー・ビー・グッド Lady, Be Good」1924),「私の彼氏 The Man I Love」(同前), ジャズバンドとピアノのための「ラプソディ・イン・ブルー」(1924。初演ではガーシュインがピアノを弾く。「アメリカ交響楽」も同じ),「ヘ調のピアノ協奏曲 Concerto in F for Piano and Orchestra」(1924。

初演ではガーシュインがピアノを弾く。「アメリカ交響楽」も同じ),「スワンダフル 'S Wonderful」(ミュージカル「ファニー・フェイス Funny Face」1927), 管弦楽曲「パリのアメリカ人 An Aerican in Paris」(1928),「抱きしめたいあなた Embraceable You」(ミュージカル「ガール・クレイジー Girl Crazy」1930),「アイ・ガット・リズム I Got Rhythm」(同前),「サマータイム Summertime」(オペラ「ポーギーとベス Porgy and Bess」。1935。初演歌

手アン・ブラウン Anne Brown が「アメリカ交響楽」にも出演して歌う）等、商業音楽からもクラシック音楽からも選曲され、今日も繰り返し演奏される曲目が並ぶ。

音楽を挿入しながら人生を描くという点で、井上の音楽劇の原点は「アメリカ交響楽」にあると言えるだろう。そして、井上が音楽劇にピアニストを使うのも「アメリカ交響楽」の影響からではないか。

2. ガーシュインとレヴァントー二人のピアニスト

「アメリカ交響楽」では重要なピアニストが二人いる。一人はもちろんガーシュインで、二枚目俳優のアルダ Alda, Robert (1914–1986) が演じる。もう一人はガーシュインの友人レヴァント Levant, Oscar (1906–1972) である。レヴァントは映画俳優でもあり、「アメリカ交響楽」には本人役で出演し、あくの強い演技を見せる。長身でハンサムでパーティーの人気のガーシュインと背が低く醜男で皮肉屋のレヴァントは見た目も人柄も対照的であるが、ピアニストとしてのタイプも異なっていた。

ガーシュインは実家が音楽とは無縁だったのでピアノの訓練を始めるのが遅く、弾けるようになっても優等生ではなかった。「アメリカ交響楽」ではショパン Chopin, Frédéric-François (1810–1849) 作曲「蝶々 Papillons」(練習曲 Etudes op.25-9) や「ノクターン Nocturne 第2番」(op.9-2) のレッスン中に、教師の目を盗んでは自分流にアレンジして弾き、教師が怒ると楽譜通りの弾き方に戻し、それを繰り返しては面白いシーンがある。ガーシュインの強みは天性の音楽センスと即興演奏の能力であった。また、無名時代にブロードウェイのショーのリハーサル・ピアニストをしており(ウッド1998: 58)、その経験が後年の創作に生かされていく。一方、レヴァントはガーシュインには叶わなかったコンサート・ピアニストの訓練を積んでいて、ショパンの全曲を暗譜で弾くことができた(ウッド1998: 228–229)。

「アメリカ交響楽」ではガーシュインは「スワニー」を売り込みに行ったハームズ社でレヴァントと出会う。ガーシュインは好条件で契約を結び作曲家の道を歩き出す。レヴァントは門前払いを食らった上にいち早くガーシュインの才能に気づき、呪縛されて

しまった。以後、レヴァントはガーシュインと行動を共にしてガーシュイン作品の優れたピアニストになった。「アメリカ交響楽」のレヴァントは「俺たちのラブソディ our rhapsody」, 「俺たちのコンチェルト our concerto」と言うほどガーシュインと一体化したが、ラパー Rapper, Irving (1898–1999) 監督も「ラブソディ・イン・ブルー」と「へ調のピアノ協奏曲」の演奏シーンはガーシュインとレヴァントの2種類のソロで撮った。また、ガーシュインとレヴァントが2台のピアノで掛け合いながら「アイ・ガット・リズム」に基づく即興演奏を行ったり、連弾をしながら「私のもの Mine」(二重唱)を歌うシーンも撮った。実は「アメリカ交響楽」ではガーシュインのソロは映像はアルダだが演奏はレヴァントのものを使っている⁽³⁾。レヴァントは自分の役を演じるとともにピアニストとしては自分とガーシュインの二人分を弾く。ただし、2台のピアノや連弾ではガーシュインのソロはターナー Turner, Ray というピアニストの演奏を使う。「アイ・ガット・リズム」や「私のもの」の演奏シーンでガーシュインとレヴァントが並ぶと、レヴァントの方が存在感があるのはそうした理由からである。

「アメリカ交響楽」ではガーシュインが主役、レヴァントは口の悪い道化役であり、レヴァントは尊敬と嫉妬で味つけしたジョークを飛ばしながらガーシュインに尽くすという複雑な役柄を演じた。しかし、ピアニストとしてはレヴァントはアルダが演じるガーシュインを圧倒していた。「アメリカ交響楽」でガーシュインが見せた「自作自演のピアニスト」とレヴァントが見せた「演技するピアニスト」は、井上にとってステージピアニストのモデルではないだろうか。

3. 「ピアノ語」を繰るピアニスト

「アメリカ交響楽」を観た井上は、デビュー作「日本人のへそ」(1969年2月テアトル・エコー初演)でピアニストに起用した服部公一に作曲も担当させ、さらに「ピアノ伴奏者」という役名を与えて舞台に上げた。(劇中では「ピアノ伴奏者」は初演ピアニストの名前にちなみハットリ君と呼ばれる。)井上は「日本人のへそ」の初演ピアニストに「自作自演のピアニスト」と「演技するピアニスト」の両方を求めた。しかし、日本では作曲家兼ピアニスト

は少なからずいるが、ピアニストが本業だが個性派俳優でもあるような人材を見つけるのは難しい。それでも井上はピアニストの演技にこだわった。そのため井上は「ピアノ伴奏者」を「吃音ピアニスト」と設定し、役者が専門ではないピアニストに「ピアノの音が吃る」という演技を課した。ピアニストは演奏曲の最初の音をスムーズに出せなかったり、最初の音だけ何回も叩いてしまう度に苦悶するが、最初の音さえ出せばあとは途切れずに弾く、といったピアノの吃音症状を打鍵のテクニックで表現する。「日本人のへそ」で試みた打鍵の演技は、のちに井上が「ピアノ語」と呼ぶ演技へと発展していく。

「ピアノ語」が初めて登場する作品は、「きらめく星座」(1985年9月こまつ座初演)である。井上は「きらめく星座」のピアニストに「森本忠夫」という役名を与え、「特別なことが起こらない限りピアノの前を離れようとしないう青年」と設定し、歌の伴奏に配慮した上で、ピアノ語を使わせた。たとえば、森本は「ピアノをガーンと叩く」所作で怒り、「ピアノを叩いてから頭を下げる」所作で謝意を伝える。森本は「玉子は、いま、たべない方がいい。雛をかへして大きく育て鶏肉のスキ焼にした方がいい。」というような複雑な内容もピアノ語で伝えるが、このときは井上も森本が叩く音を聞いて通訳する者をつけた。なお、ピアノ語の「音」は指定されているのか、それともピアニストに任されているのかは戯曲を読んだ限りでは不明である。

「國語元年」(1986年1月こまつ座初演)のピアニストは「江本太吉」という役名で、アメリカ帰りのため「主として無口」な洋楽教授という設定である。多吉は多少の英語を話す一方、忘れてしまった日本語の代わりにピアノ語を使う(「おめでとうございます」と祝意を表すためにピアノを鳴らす)。「花よりタンゴ」(1986年9月こまつ座初演)のピアニストは「森川俊夫」という役名で、ダンスホールのピアニストという設定である。初演ピアニストの村山俊哉は「きらめく星座」,「國語元年」に続く3度目の起用である。そのためか、井上は村山が演じる森川にピアノ語を使わせるものの(「ピアノを叩いて胸も叩く」所作で了解する),役者並みにせりふを与えて演技させた。反対に,「黙阿彌オペラ」(1995年1月こまつ座初演)の初演ピアニストで「陳青年」役(清国人ピアニストという設定)の朴勝哲は井上作品には初参加だったので、歌を伴奏す

るときとピアノ語を使用するとき(演奏の乱れで驚きを表す)以外は「ピアノの部品」と化して舞台上で動かずにいる。朴の場合も2度目の起用となる「連鎖街のひとびと」(2000年6月こまつ座初演)「崔明林」(朝鮮人ピアニストで大連中央放送局管弦楽団員という設定)役になると、井上は朴が演じる崔にピアノ語も使わせるが(ガーンと不協和音を叩いて不快を表す),役者並みにせりふを与えて演技させた。「紙屋町さくらホテル」(1997年10月新国立劇場初演)のピアニストは井上作品では唯一の女性で、役名は「浦沢玲子」(戦時下の移動劇団「さくら隊」の新人隊員という設定)である。玲子は「あなたはピアノもひかなければならないからたいへんでしょうが、今みたいに大きな声を出してください」と幹部から演技の注意を受けるが、裏返せば玲子役のピアニストへの配慮であろう。また、玲子は劇中劇の「擬音係」として雨団扇を叩いて雨音を出しており、これはピアノ語に代わる所作と見ることができる。

以上,「きらめく星座」から「紙屋町さくらホテル」まで、井上はピアニストに役名を与えて歌の伴奏だけでなく「ピアノ語」という打鍵の演技を課して「演技するピアニスト」を追求した。ただし、劇中歌の作曲を含め音楽全般は井上が放送作家時代からコンビを組む作曲家宇野誠一郎(1927-2011)が担当しているので,「ピアノ語」を繰るピアニストは「自作自演のピアニスト」ではなかった。

4. 演奏本位のピアニスト

ところが、井上は2001年5月初演の「夢の裂け目」(新国立劇場公演)から音楽劇のピアニストには役名を与えず、演奏に専念させるようになった。確かに、新国立劇場用の一連の作品-「夢の裂け目」(2000年6月初演),「夢の泪」(2003年10月初演),「箱根強羅ホテル」(2005年5月初演),「夢の痂」(2006年6月初演)では、ピアニスト(またはキーボード奏者)はオーケストラピットの中で演奏するので、舞台上の役者とピアノ語でやりとりするのは難しいかもしれない。しかし、ピアニスト1名を使うこまつ座作品-「太鼓たたいて笛ふいて」(2002年7月初演),「兄おとうと」(2003年5月初演),「円生と志ん生」(2005年2月初演),「私はだれでしょう」(2007年1月初演),「ロマンス」

(2007年8月初演)、「組曲虐殺」(2009年10月初演)でも、井上はピアニストに役名を与えず、ピアノ語による演技も封印した。それに伴って、以前のピアノ語を繰るピアニストは演奏本位のピアニストへと変わった。ピアニストはピアノ演奏が本業であるとは音楽界では自明のことだが、井上作品においては最後の9年間だけに言えることである。井上に何が起きたのか。そこで筆者が注目するのが井上の楽典の勉強である。

井上は歌が好きで、台本に多くの歌を挿入する放送作家を経て音楽劇を得意とする劇作家となったが、実は楽譜が読めなかったことを「遅まきながら楽典を」(井上1998a)というエッセイで告白している。これは1990年8月23日付読売新聞に発表され、井上は50代半ばになって読譜力をつけるために楽典の勉強を始めたことを述べている。表1-①で言えば、井上が楽典の勉強を始めたのは「花よりタンゴ」(1986年9月初演)と「黙阿彌オペラ」(1995年1月)の間の時期で、ピアニストにピアノ語を使わせていた最中であった。もっとも勉強自体ははかどらず、むしろ楽典と一緒に買い込んだクラシック音楽の楽譜に歌詞をつけることが面白くなった。たとえば、ベートーヴェン Beethoven, Ludwig van (1770-1827) 作曲「ヴァイオリン協奏曲」(op.61)なら独奏ヴァイオリンの旋律にベートーヴェンの生涯を綴った歌詞を付けていく⁽⁴⁾。こうした「余得」を活用した最初の作品が「夢の裂け目」である。楽典の勉強を始めてから10年あまり、「夢の裂け目」において井上は満を持して「最高最大の作曲家」と見なすワイルのオペラやミュージカルから代表曲を選び、その旋律に歌詞をつけ、劇中歌として使用した⁽⁵⁾。そして「夢の裂け目」から「ロマンス」までの6年間、井上はクラシックの作曲家たちの作品に積極的に歌詞をつけ、さらに「劇中歌リスト」を作成して原曲のタイトルと作曲家の名前を明記して戯曲に添付した。もちろん、井上はワイルと並んで愛好する

ガーシュインの作品からも表3に示すように「リトル・ジャズ・バード Little Jazz Bird」(「私はだれでしょう」の「脚本班分室の作業歌」原曲)、「ドゥー・ドゥー・ドゥー Do Do Do」(「ロマンス」の「チェーホフの噂」原曲)、「ストライク・アップ・ザ・バンド Strike Up the Band」(「兄おとうと」再演版⁽⁶⁾の「説教強盗の唄」原曲)の3曲を使った。「めったに聴かない」と言っていたモーツァルトの作品も「老婆 Die Alte」という歌曲を使った(「私はだれでしょう」の「ヘギンズ中佐のための、突発的はめ唄」原曲)。「太鼓たたいて笛ふいて」は最初はモーツァルトの作品を使う計画であったが、ベートーヴェンとチャイコフスキー Tchaikovsky, Pytor Il'ych (1840-1893)の作品に変更したと言う(扇田2011: 175-176)。

歌詞づけ作業を通じてクラシック音楽を音楽劇に活用する術を身につけた井上は、ピアニストには文字通りピアノ演奏だけを任せ、音楽全般は相変わらず作曲家の宇野誠一郎が担当していた。しかし、最後の新作となった「組曲虐殺」(2009年10月初演)では、井上はジャズピアニストの小曾根眞を起用し、音楽全般を担当させ、劇中歌は全曲を井上が作詞し、小曾根が作曲し演奏するという体制で臨んだ。その点で「組曲虐殺」の初演ピアニストは「自作自演のピアニスト」である。そしてジャズと言えば、今日、ガーシュインの歌曲には「私の彼氏」や「誰かが私を愛してる」のようにジャズのスタンダードナンバーとなったものがあるが、ジャズピアニストはあの「アメリカ交響楽」におけるガーシュインのショパン演奏のように即興演奏で原曲をより魅力的に変奏することを当たり前に行う。「変奏」は「変装」に通ずる点で「組曲虐殺」の初演ピアニストは「演技するピアニスト」でもある。井上は40年間の作劇活動の最後の作品となった「組曲虐殺」において、役名を与えずとも、ピアノ語という奇抜な趣向に頼らずとも、少年時代に印象づけられた「アメリカ交

表3. 井上ひさしの音楽劇におけるガーシュインの使用状況

- | | |
|---|--|
| 1 | リトル・ジャズ・バード Little Jazz Bird (レディー・ビー・グッド Lady, Be Good, 1924)
⇒脚本班分室の作業唄(私はだれでしょう、2007年1月初演) |
| 2 | ドゥー・ドゥー・ドゥー Do, Do, Do (オー、ケイ! Oh, Kay!, 1926)
⇒チェーホフの噂(ロマンス、2007年8月初演) |
| 3 | ストライク・アップ・ザ・バンド Strike up the Band (ファニー・フェイス Fanny Face, 1927)
説教強盗の唄(兄おとうと、2006年1月の再演追加曲) |

響楽」の「自作自演のピアニスト」と「演技するピアニスト」はステージピアニストの演奏の中で両立することをようやく証明してみせたのであった。

注.

- (1)「夢の裂け目」はワイル作曲「三文オペラ Die Dreigroschenoper」(1928年初演、於ベルリン)を下敷きにして書いた部分が目立つが(坂本2011)、「夢の裂け目」が小楽団を使うのも「三文オペラ」に倣ったと推測される。
- (2)「アメリカ交響楽」の英和対訳台本は「モーション・ピクチャ・ライブラリー」第六(東京:新生活社, 1947年)に収められている。日本語訳者は尾坂力。本稿は国立国会図書館近代ライブラリー(電子資料)を使用する。
- (3)「アメリカ交響楽」の英和対訳台本(注2参照)の野口久光による解説8頁参照。
- (4)ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を原曲とする劇中歌を使った作品は見当たらないが、協奏曲自体は「組曲虐殺」で主人公小林多喜二の愛好曲として使われている。
- (5)「夢の裂け目」で使用されたワイル作品については坂本2011を参照。
- (6)「ストライク・アップ・ザ・バンド」は「兄おとうと」の再演時(2006年1月)に追加された「説教強盗の唄」の原曲である。再演版「兄おとうと」の戯曲は『井上ひさし全芝居その六』に収められているが、劇中歌リストを欠く。筆者はこまつ座に問い合わせ確認した。

参考文献.

- 井上ひさし(1992)「ブロードウェイ仕事日記」(初出1985)『遅れたものが勝ちになる』(エッセイ集6)所収, 107-157頁。東京:中央公論社
- 井上ひさし(1998a)「遅まきながら楽典を」(初出1990)『死ぬのがこわくなる薬』(エッセイ集8)所収, 38-40頁。東京:中央公論社
- 井上ひさし(1998b)「好きで嫌いで好きなアメリカ」(初出1991)『餓鬼大将の論理』(エッセイ集10)所収, 72-77頁。東京:中央公論社
- ウッド Wood, Ean(1998)別宮貞雄監訳「ガーシュイン 我, 君を歌う」東京:ヤマハミュージックメディア

クレシュ Kresh, Paul(1989)鈴木晶訳「アメリカン・ラプソディ ガーシュインの生涯」東京:晶文社

坂本麻実子(2004)「役者に歌わせる井上ひさしの手法」『桐朋学園大学研究紀要』第30集, 10月, 135-140頁。

坂本麻実子(2009)「井上ひさしと6人の役者による音楽劇」『富山大学人間発達科学部紀要』第4巻第1号, 11月, 37-48頁。

坂本麻実子(2011)「井上ひさしによるヴァイルのメロディー尽くしー『夢の裂け目』の音楽的趣向についてー」『富山大学人間発達科学部紀要』第5巻第2号, 3月, 113-122頁。

扇田昭彦[編](2011)『井上ひさし』東京:白水社

※本稿で扱う音楽劇はすべて『井上ひさし全芝居』(東京:新潮社)に基づく。

日本人のへそ→『井上ひさし全芝居その一』(1984)所収

きらめく星座, 國語元年, 花よりタンゴ→『井上ひさし全芝居その四』(1994)所収

黙阿彌オペラ, 紙屋町さくらホテル, 連鎖街のひとびと, 太鼓たたいて笛ふいて, 兄おとうと(再演版)→『井上ひさし全芝居その六』(2010)所収

夢の裂け目, 夢の泪, 円生と志ん生, 箱根強羅ホテル, 夢の痴, 私はだれでしょう, ロマンズ, 組曲虐殺→『井上ひさし全芝居その七』(2010)所収

(2011年10月20日受付)

(2011年12月14日受理)

